

－ 原 著 －

保育者のレジリエンスと保育者効力感の関連

川 村 高 弘 庄 司 圭 子 三 木 さ ち 子

The Relationship between Resilience and Teaching Efficacy
of Childcare Specialists

Takahiro KAWAMURA Keiko SHOJI Sachiko MIKI

要 旨

目まぐるしく変容する社会情勢を見据え、子どもを取り巻く環境の変化に応じ、保育者が質の高い保育を展開していくためには、高度な保育技術を身につけ、様々な状況に柔軟に対応し、専門職としてのキャリアを形成していかなければならない。そのためにはレジリエンスと保育者効力感が高い必要がある。そのため、本研究では保育者を対象に質問紙調査を実施し、レジリエンスと保育者効力感の関連を検討した。分析の結果、レジリエンスの因子「楽観的な将来展望と自己肯定感」「成長志向性」「信頼できる他者の存在と充実感」の全てと経験年数とが、保育者効力感の因子「肯定的効力感」に対し、正の有意な関連を示した。また、レジリエンスの因子「信頼できる他者の存在と充実感」が保育者効力感の因子「否定的効力感」に対し、負の有意な関連を示した。

キーワード：保育者，レジリエンス，保育者効力感，経験年数

I. 問題と目的

日々目まぐるしく変化する社会情勢の中、地域や家庭の教育力の低下や教育・保育に対するニーズの多様化に伴い、幼稚園で働く保育者に対する期待は今まで以上に高まってはいる。しかし、全国的に保育者の早期離職の問題は深刻化している(川村, 2012)。保育者を取り巻く環境には、様々な困難が存在することは否定できない。しかしながら、困難な状況や逆境に直面したとしても、すべての保育者が離職をするわけではない。様々な困難に直面しても、それを乗り越え、継続の意欲とやりがいを感じながら、専門職としてのキャリアを形成していく保育者の資質能力として、レジリエンスが注目されている。

レジリエンスは、近年、欧米の臨床心理学および健康心理学の学会において注目され始めた新しい概念であり、「逆境に耐え、試練を克服し、感情的・認知的・社会的に健康な精神活動

を維持するのに不可欠な心理特性」(森ら, 2002)と説明されている。森ら(2002)は、平成8年7月に提出された中央教育審議会の第1次答申「21世紀を展望したわが国の教育のあり方について」の「生きる力」に関する記述の中の、「よりよく問題を解決する資質や能力, 自らを律しつつ, 他人とともに協調し, 他人を思いやる心や感動する心を持った豊かな人間性と, たくましく生きるための健康や体力」をレジリエンスと捉えている。

さらに、保育者が専門性と資質を備えて保育を行うことは、子どもの発達を支える上で、非常に重要な役割を担う。近年、保育者の資質向上に関して、「保育者効力感」という概念が提唱されるようになってきている。三木・桜井(1998)は、教師効力感の代わりに保育者効力感という用語を用い、保育者効力感を、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができる信念」と定義している。西山(2006)は、「保育者効力感の高い者は、実践を活発に行い努力し、自分の能力をうまく活かすことができるが、保育者効力感の低い者は、積極的な実践ができなかったり、取り組み自体を避けたりしてしまう」と述べている。

以上のことから、保育者に必要な資質とは、様々な困難に直面しても、その困難に立ち向かい、それを乗り越えていくためのレジリエンスと、保育者としての自信ともなりうる保育者効力感ではないだろうか。

本研究では、保育者のレジリエンスと保育者効力感の関連を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象と調査時期

2014年8月中旬～8月下旬にかけて、関西圏にある42園の幼稚園に質問紙を郵送した。常勤及び非常勤の幼稚園教諭に無記名自記式で回答してもらい、園毎に郵送によって回収した。配布は全231票で、38園198名の幼稚園教諭から回答を得た(回収率85.7%)。そのうち回答に不備のなかった187名のデータを分析に用いた。

2. 調査内容と質問項目

レジリエンス尺度の項目42項目、及び保育者効力感尺度の15項目の質問紙調査を実施した。レジリエンス尺度については、森ら(2001)が学生を対象に作成した自己教育力とレジリエンス研究の質問項目を保育者用に項目の追加・削除及び改変して実施した。保育者効力感尺度については、三木・桜井(1998)らが学生用に作成した保育者効力感研究の質問項目を保育者用に改変して用いた。いずれの尺度に対しても、「5. よくあてはまる」「4. 少しあてはまる」「3. どちらでもない」「2. あまりあてはまらない」「1. まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。

統計処理には、統計ソフトウェア SPSS Statistics 19.0を使用した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 調査回答者の属性

本調査の回答者の属性は、表Ⅲ-1-1のようになった。

表Ⅲ-1-1 回答者属性

調査項目	内 容	度 数	パーセント
性 別	女性	182	97.3
	男性	5	2.7
	合計	187	100.0
経験年数	1年未満	13	7.0
	1年以上5年未満	28	15.0
	5年以上10年未満	43	23.0
	10年以上20年未満	50	26.7
	20年以上	53	28.3
	合計	187	100.0

2. レジリエンスについての分析

表Ⅲ-2-1は、レジリエンス尺度の質問項目と平均値（標準偏差）である。これらのレジリエンス尺度13項目を対象に、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、3因子が得られた（表Ⅲ-2-2）。

各因子の信頼性を検証するためにCronbachの α 係数を求めたところ、第1因子は $\alpha = .837$ 、第2因子は $\alpha = .717$ 、第3因子は $\alpha = .670$ であり、内的一貫性のあることが確かめられた。第1因子は、「私は、どんなことでも、たいてい何とかかなりそうな気がする」「私は、自分には、よいところがたくさんあると思う」「私は、困難なことでも前向きに取り組むことができる」などで構成されるものであり、「楽観的な将来展望と自己肯定感」と命名した。第2因子は、「私

表Ⅲ-2-1 保育者のレジリエンス尺度の質問項目と平均値（標準偏差）

	項 目	平均値	(SD)
1	私は、保育の中で、うまくいかなかったとき、どこが悪かったのかを反省し、改善している	4.24	.614
2	私は、難しいことにてあっても、乗り越える自信がある	3.76	.795
3	私は、自分の不得意なところを改善しようと努力している	4.03	.617
4	私は、保育者としてやりがいや充実感を感じている	4.25	.814
5	私には、いざというときに相談したり頼りにできる人が園内にいる	4.08	.903
6	私には、いざというときに相談したり頼りにできる人が園外にいる	4.54	.641
7	私は、たいていの人が持っている能力が自分にもあると思う	3.22	.956
8	私は、いつまでもこの仕事を続けたいと思う	3.78	.996
9	私は、自分には、よいところがたくさんあると思う	3.41	.841
10	私は、困難なことでも前向きに取り組むことができる	3.74	.790
11	私は、どんなことでも、たいてい何とかかなりそうな気がする	3.76	.910
12	私は、保育者になったことで、人間的に成長できていると思う	4.41	.660
13	私は、自分自身を成長させるために日々努力している	3.92	.704

表Ⅲ－２－２ 保育者のレジリエンス因子分析結果

項 目	1 樂觀的な将来展望と自己肯定感	2 成長志向性	3 信頼できる他者の存在と充実感	共通性
11 私は、どんなことでも、たいてい何とかかなり そうな気がする	.967	-.204	-.034	.748
9 私は、自分には、よいところがたくさんある と思う	.924	-.124	-.031	.726
10 私は、困難なことでも前向きに取り組むこと ができる	.817	.121	-.076	.727
7 私は、たいていの方が持っている能力が自分 にもあると思う	.645	.070	-.087	.419
2 私は、難しいことにてであっても、乗り越える 自信がある	.546	.231	.069	.537
3 私は、自分の不得意なところを改善しようと 努力している	-.143	.911	-.063	.678
13 私は、自分自身を成長させるために日々努力 している	.046	.796	-.084	.621
1 私は、保育の中で、うまくいかなかったとき、 どこが悪かったのかを反省し、改善している	-.024	.695	.001	.467
12 私は、保育者になったことで、人間的に成長 できていると思う	.212	.381	.285	.503
5 私には、いざというときに相談したり頼りに できる人が園内にいる	-.161	-.150	.841	.551
4 私は、保育者としてやりがいや充実感を感じ ている	.130	.073	.701	.650
6 私には、いざというときに相談したり頼りに できる人が園外にいる	-.144	-.018	.697	.407
8 私は、いつまでもこの仕事を続けたいと思う	.229	.047	.563	.524
固有値	4.896	1.413	1.248	
累積寄与率	37.659	48.527	58.128	

は、自分の不得意なところを改善しようと努力している」「私は、自分自身を成長させるために日々努力している」「私は、保育の中で、うまくいかなかったとき、どこが悪かったのかを反省し、改善している」など自分を高め成長していくことに関係を示す項目の負荷量が高いため、「成長志向性」と命名した。第3因子は、「私には、いざというときに相談したり頼りにできる人が園内にいる」「私は、保育者としてやりがいや充実感を感じている」「私には、いざというときに相談したり頼りにできる人が園外にいる」など、相談できる他者や仕事の充実感に関係を示す項目の負荷量が高いため、「信頼できる他者の存在と充実感」と命名した。

3. 保育者効力感についての分析

表Ⅲ－３－１は、保育者効力感尺度の質問項目と平均値（標準偏差）である。これらの保育者効力感尺度の15項目に対し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、2因子が得られた（表Ⅲ－３－２）。

各因子の信頼性を検証するためにCronbachの α 係数を求めたところ、第1因子は $\alpha = .923$ 、第2因子は $\alpha = .711$ であったため、内の一貫性が確かめられた。第1因子は、「私は、子どもに食育を分かりやすく指導することができると思う」「私は、いろいろな子どもに応じた食育

表Ⅲ-3-1 保育者の保育者効力感尺度の質問項目と平均値（標準偏差）

項 目	平均値	(SD)
1 私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う	3.68	.888
2 私は、子どもの特性に応じた課題に対する援助がうまくできると思う	3.53	.881
3 私が一生懸命努力しても、登園を嫌がる子どもをなくすことはできないと思う	2.23	.859
4 私は、保育プログラムが急に変更された場合でも、それにうまく対処できると思う	3.60	.847
5 私は保育者として、クラスのほとんどの子どもが理解できるように働きかけることは無理であると思う	1.97	.712
6 私は、クラスの子ども一人ひとりの性格を理解できると思う	3.98	.703
7 私が、やる気のない子どもにやる気を起こさせることは、むずかしいと思う	2.15	.768
8 私は、どの年齢の担任になっても、うまく対処できると思う	3.47	.942
9 私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う	3.55	.837
10 私は、保護者に信頼を得ることができると思う	3.81	.684
11 私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う	3.80	.687
12 私は、クラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分できると思う	3.67	.871
13 私は、一人ひとりの子どもにあった遊びの指導や援助を適切に行えると思う	3.64	.810
14 私は、園で子どもに基本的生活習慣を身につけさせることはなかなかむずかしいと思う	2.26	.940
15 私は、子どもの活動を考慮し、適切な保育環境（人的、物的）を整えることに十分努力できると思う	3.84	.771

表Ⅲ-3-2 保育者の保育者効力感因子分析結果

項 目	1 肯定的効力感	2 否定的効力感	共通性
2 私は、子どもの特性に応じた課題に対する援助がうまくできると思う	.953	.238	.744
13 私は、一人ひとりの子どもにあった遊びの指導や援助を適切に行えると思う	.882	.093	.707
1 私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う	.882	.194	.649
12 私は、クラス全体に目をむけ、集団への配慮も十分できると思う	.818	-.037	.700
4 私は、保育プログラムが急に変更された場合でも、それにうまく対処できると思う	.776	.051	.566
8 私は、どの年齢の担任になっても、うまく対処できると思う	.742	-.135	.666
9 私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う	.675	-.194	.621
6 私は、クラスの子ども一人ひとりの性格を理解できると思う	.670	-.130	.551
10 私は、保護者に信頼を得ることができると思う	.621	-.119	.472
11 私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う	.578	-.262	.550
15 私は、子どもの活動を考慮し、適切な保育環境（人的、物的）を整えることに十分努力できると思う	.402	-.188	.271
5 私は保育者として、クラスのほとんどの子どもが理解できるように働きかけることは無理であると思う	-.039	.792	.660
3 私が一生懸命努力しても、登園を嫌がる子どもをなくすことはできないと思う	.063	.762	.537
7 私が、やる気のない子どもにやる気を起こさせることは、むずかしいと思う	-.047	.746	.593
14 私は、園で子どもに基本的生活習慣を身につけさせることはなかなかむずかしいと思う	.086	.649	.374
固有値	7.018	1.642	
累積寄与率	46.787	57.734	

の指導ができると思う」などで構成されるものであり、これを「肯定的効力感」と命名した。第2因子は、「私は保育者として、クラスのほとんどの子どもが食の大切さを理解できるように働きかけることは無理であると思う」「私は、一生懸命努力しても、好き嫌いのある子どもをなくすことはできないと思う」などで構成されるものであり、これを「否定的効力感」と命名した。

4. レジリエンスと保育者効力感との関係

レジリエンスと保育者効力感との関係を検討するため、レジリエンスの因子分析で得られた3因子（「楽観的な将来展望と自己肯定感」「成長志向性」「信頼できる他者の存在と充実感」）と経験年数を独立変数とし、保育者効力感の分析で得られた2因子（「肯定的効力感」「否定的効力感」）を従属変数とし、重回帰分析を行った（表Ⅲ-4-1、Ⅲ-4-2）。

分析の結果、保育者効力感の「肯定的効力感」に関しては、レジリエンスの因子「楽観的な将来展望と自己肯定感」「成長志向性」「信頼できる他者の存在と充実感」の全てと経験年数とが、正の有意な関連を示した。よって、保育者としての経験年数を積み重ねるとともに、「楽観的な将来展望と自己肯定感」「成長志向性」「信頼できる他者の存在と充実感」の高まりが、保育者効力感の「肯定的効力感」に影響を与え、保育者としての自信につながっていることが明らかになった（表Ⅲ-4-1）。

また、保育者効力感の「否定的効力感」に関しては、レジリエンスの「信頼できる他者の存在と充実感」が負の有意な関連を示した。よって、信頼できる他者の存在がなかったり、保育の仕事に充実感が得られなければ、保育者効力感の「否定的効力感」が高まり、保育者としての自信低下に影響を与えることが明らかになった（表Ⅲ-4-2）。

表Ⅲ-4-1 「肯定的効力感」を従属変数とした重回帰分析

変数	標準編回帰係数	t値
楽観的な将来展望と自己肯定感	.345	5.62**
成長志向性	.201	3.24**
信頼できる他者の存在と充実感	.142	2.47*
経験年数	.414	8.11**

* $p<.05$, ** $p<.01$,

表Ⅲ-4-2 「否定的効力感」を従属変数とした重回帰分析

変数	標準編回帰係数	t値
楽観的な将来展望と自己肯定感	-.153	-1.88
成長志向性	-.152	-1.84
信頼できる他者の存在と充実感	-.310	-4.05**
経験年数	.065	0.96

* $p<.05$, ** $p<.01$,

5. 考察

本研究の結果から、保育者のレジリエンスは次の「楽観的な将来展望と自己肯定感」「成長志向性」「信頼できる他者の存在と充実感」の3因子で構成されており、保育者効力感は「肯定的効力感」「否定的効力感」の2因子で構成されていることが明らかになった。

また、レジリエンス尺度の「楽観的な将来展望と自己肯定感」「成長志向性」「信頼できる他

者の存在と充実感」の全ての因子と経験年数とが、保育者効力感の「肯定的効力感」に影響を及ぼしていた。

さらに、レジリエンス尺度の第3因子「信頼できる他者の存在と充実感」の低下が、保育者効力感の「否定的効力感」の高まりに影響を及ぼしていた。

将来の目標に向かって、前向きな展望をもち続けながら、肯定的に自己を捉え、自分自身を高めていくことが、保育者効力感を向上させることにつながると考えられる。また、子どもの成長とともに、保育者として成長し続けるためには、困ったことを相談したり、協力し合うことができる他者の存在が大きいと思われる。特に守秘義務厳守である保育現場においては、園内の保育者同士が支え合うことが重要であると考えられる。

IV. まとめと今後の課題

本研究では、保育者のレジリエンスと保育者効力感の構造を分析し、レジリエンスと保育者効力感の関連を検討するという課題に取り組んだ。

分析の結果、レジリエンスの因子「楽観的な将来展望と自己肯定感」「成長志向性」「信頼できる他者の存在と充実感」の全てと経験年数とが、保育者効力感の因子「肯定的効力感」に対し、正の有意な関連を示した。また、レジリエンスの因子「信頼できる他者の存在と充実感」が保育者効力感の因子「否定的効力感」に対し、負の有意な関連を示した。

しかし、本研究はまだ緒についたばかりであり、幼稚園教諭の保育者としての専門的成長を追求するにはまだまだ不十分な点も数多い。今後ともさらにデータを積み重ね、早期離職という幼稚園や保育所が構造的に抱えている問題の解決に資する研究を行っていきたい。

また、保育者を目指す大学生のレジリエンスおよび保育者効力感について、入学時から卒業時までの縦断的調査により、レジリエンスや保育者効力感が、保育者になる前段階でどのように発達及び変容していくのかを検証する必要があると考えられる。レジリエンス及び保育者効力感を育成としての観点から研究を積み重ね、保育者養成にとって有効となりうる実践プログラムを構築・検討することもこれからの研究課題である。

引用文献

- 川村高弘 (2012). 幼稚園教諭における自己教育力とレジリエンスおよび保育者効力感との関連. 修士論文 (愛媛大学大学院).
- 西山修 (2006). 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成. 保育学研究, 44 (2), 150-160.
- 三木知子・桜井茂男 (1998). 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. 教育心理学研究, 46, 203-211.
- 森敏昭・清水益治・石田潤・富永美穂子・C. Hiew, C. C. (2002). 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 広島大学教育学部附属教育実践センター (編). 広島大学教育学部学校教育実践学研究, 8, 179-187.

参考文献

- 川俣美砂子 (2008). 幼稚園教諭のライフコースとその問題－幼稚園教諭と保育者養成 学生の性別役割意識について－. 福岡女子短期大学紀要, 71, 17-26.
- 川村高弘 (2010). 保育専攻短期大学生のレジリエンスと保育者効力感の関係. 愛媛女子短期大学紀要, 22, 17-24.
- 川村高弘・岡部康成 (2011). 保育専攻短期大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 浜松学院大学研究論集, 8, 141-150.
- 厚生労働省 (2008). 保育所保育指針.
- 西坂小百合 (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響. 教育心理学研究, 50, 283-290.
- 西村正子 (2000). 看護職者の生涯学習 年代別比較と自己教育力からの検討. 岐阜大学医療技術短期大学部紀要, 7 (1), 45-55.
- 宮里智恵・川村高弘 (2013). 大学生の自己教育力と食育効力感の関連くらしき作陽大学研究紀要, 45 (2), 43-52.
- 森敏昭・清水益治・石田潤 (2000). 大学生の自己教育力に関する発達の研究. 広島大学教育学部紀要, 第1部, 49, 7-14.
- 森敏昭・石田潤・清水益治・富永美穂子 (2001). 大学生の自己教育力に影響する要因はなにか. 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第1部, 50, 1-8.
- 森敏昭・清水益治・石田潤・富永美穂子・C.Hiew, C.C. (2002). 大学生の自己教育力とレジリエンスの関係. 広島大学教育学部附属教育実践センター (編). 広島大学教育学部学校教育実践学研究, 8, 179-187.
- 文部科学省 (2002). 「幼稚園教員の資質向上について－自ら学ぶ幼稚園教員のために－」報告書.
- 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.

付記

本研究を行うにあたり, ご協力いただいた幼稚園教諭の皆様方に心より感謝申し上げます。